Angel Beats！―Not Transfer Way―

高橋ひさ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！―Ｎｏｔ　Ｔｒａｎｓｆｅｒ　Ｗａｙ―

【Ｎコード】
Ｎ７２７５Ｏ

【作者名】
高橋ひさ子

【あらすじ】
これは死後の世界。
その最前線に迷い込んだ一人の少年の物語である。

まともに生きた意味を見いだせずに死んだ少年は死んだ後の世界に迷い込む。

死後の世界は果てのない森に囲まれた巨大な学校。

そこで寮生活をしながら、一般生徒（ＮＰＣ）と共に学生生活をおくることで生前の憂いを晴らし、無事成仏（消える）出来ることを目的にした神？が作り出した世界。

しかしそこには理不尽な人生を強いた神に対して反抗しようとする少年少女達がいた。

彼らはみなそれぞれすさんだ生前を生きてき。そして死んでしまった者達。

この世界に来て少年はいきなり死後の世界で学園の生徒会長である天使と呼ばれる少女と戦う戦線のリーダーに勧誘される。

ある少女とバンドに心を奪われた少年は、変態の性質を露天しながらその少女の追っかけファンになるのだった。

毎回ハチャメチャな行動を繰り返しては戦線を困惑させる。

これは音無が死後の世界に来る少し前から始まる物語…

前書き（前書き）

この話は決して本編を害さないことを主体に置いた、少年・堺がガルデモリードギター・ひさ子を追いかける物語です。

毎回堺が起こす珍行動に、たまに会話にネタが含まれるのでそういうところも楽しんで頂ければ幸いです。
所々に感動を挟めるよう全力で挑んでいきたいです。

途中から音無が登場しますが、そこからは本編に沿って別視点の外伝的な物語になります。

更新は不定期ですが皆様に最後まで気持ちよく読んでいただけるよう精進いたしますのでどうかよろしくお願いします。

前書き

これは死後の世界。
その最前線に迷い込んだ一人の少年の物語である。

まともに生きた意味を見いだせずに死んだ少年は死んだ後の世界に迷い込む。

死後の世界は果てのない森に囲まれた巨大な学校。
そこで寮生活をしながら、一般生徒（ＮＰＣ）と共に学生生活をおくることで生前の憂いを晴らし、無事成仏（消える）出来ることを目的にした神？が作り出した世界。

しかしそこには理不尽な人生を強いた神に対して反抗しようとする少年少女達がいた。

彼らはみなそれぞれすさんだ生前を生きてき。そして死んでしまった者達。

この世界に来て少年はいきなり死後の世界で学園の生徒会長である天使と呼ばれる少女と戦う戦線のリーダーに勧誘される。

しかしその少年は自分の人生からは不幸や理不尽を感じなかった。
そんな人間が戦線に入るのはおかしいとその勧誘を断り素直に消えることを選ぼうとする。

だがそんな少年の前に一人の女の子が現れる。
それは死んだ世界戦線の戦い時に一般生徒を巻き込まないために作

られた陽動部隊の中心である、ガールズロックバンド・ガルデモのリードギターを勤める少女。

その少女に心を奪われた少年は、前言撤回し死んだ世界戦線に入り潜在的に潜んでた変態の性質を露天しながらその少女の追っかけファンになるのだった。

毎回ハチャメチャな行動を繰り返しては戦線を困惑させる。

これは音無が死後の世界に来る少し前から始まる物語…。

この話は決して本編を害さないことを主体に置いた、少年・堺がガルデモリードギター・ひさ子を追いかける物語です。

毎回堺が起こす珍行動に、たまに会話にネタが含まれるのでそういうところも楽しんで頂ければ幸いです。

所々に感動を挟めるよう全力で挑んでいきたいです。

途中から音無が登場しますが、そこからは本編に沿って別視点の外伝的な物語になります。

更新は不定期ですが皆様に最後まで気持ちよく読んでいただけるよ

う精進いたしますのでどうかよろしくお願いします。

―prologue―（前書き）

prologueです。

これから頑張っていきますのでどうかよろしくお願いします。

あと申し訳ありません、自分は区切りがいいとこまでは後書きをかきませんのでご了承ください―（・―・）―

―prologue―

中途半端、そんな言葉がよく似合ってた。

何かをやり遂げたことなどない人生。

成績も芳しくない怠惰な生活

正直、屑と言われても納得できる。

学歴が高い親や兄弟からはとおに見放されている。

何となく通っている高校。

こんな奴に人が近づくわけもなく、クラスでも常に一人だ。

誇れるものも、他人より秀でたものもない。

唯一の特技と言えるのか怪しいが、小学校の頃習ったピアノはそれなりに出来る。

しかしそれも中学校に入学してからは止めている。

親はスパルタ教育で、俺は何度も殴られながら教え込まれたが、嫌々に覚えたものなどすぐ忘れてしまうものである。

ただ学校に行っても友達のいない俺は、休み時間音楽室に行ってピアノを弾くことが楽しみの一つだった。

ピアノで曲作りなどで適当に楽しんでいるが、なかなか出来ないものである。

でもたまに、音楽室を違う生徒が使っていることがある。
一人の女の子だ。

ギターを弾く、ポニーテールが目を引く女の子。

彼女がギターを弾いている時は俺は音楽室に入らないことにしている。

理由はない。
と言えば嘘になるかもしれない。

ただ何となく、彼女のギターからは人を寄り付かせない悲しさが感じられた。

高校二年の春、彼女の姿は音楽室から忽然と消えた。
全く姿を見せなくなった。

話しかけたことのない俺は理由を知らない。
違うクラスだったが噂も聞かない。

結局、俺は彼女から感じた悲しさが、悲愴だったのか悲壮だったのか知ることができなかった。

死後の世界（前書き）

一回一回大変ですけど、すごくやりがいがあります。

今回も後書きはありません。

死後の世界

目が覚めた。
唐突に、ただ唐突に目が覚めたのだ。
眠りから覚めたのではなく、何かにおこされるわけでもなく。
「……ぁ」
目に映るのは、雲が所々に浮かぶ綺麗な青空。
……空？
どうやら俺は仰向けに倒れているようだ。
背中にはコンクリートのような固い無機質の上で寝ているような感触がある。
「……？」
状況を理解するために身を起こす。
空が反転し新たに俺の目に映ったのは、広大なグラウンドと思わしき校庭だった。
何故校庭だと確信できるか？
簡単だ、ジャージを着たいかにも学生と思われる若い少年達が、これまたいかにも体育教師と思われるムサい大人に指示をされて嫌々トラックを走っているからだ。

「……？」

さっきから疑問しか浮かばない。
今度はあたりを見渡してみる、すると俺の背中に階段があった。
上へ繋がっているコンクリートの階段、どうやら自分は階段の一番下で倒れていたようである。
階段の上の方を見上げる。
そこには巨大な校舎？のような建物が俺の視界を圧倒した。
「…まず、高いとこに登って考えるか。」
俺はこの状況を整理するため、とりあえず校舎？まで階段を登ることにした。

多少の疲労感を感じつつやっと校舎？の建っている段にあがると、俺は一人で歩いている女の子を発見した。
見た印象から毅然としたものと異彩を感じるが、このさい誰でもいい。
とりあえずここがどこなのか知りたかった俺はその女の子に話しかけるため近づく。
すると驚いたことにその女の子は俺に気づくと、不適な笑みを浮かべて俺の方に近づいてきた。

そして互いが会話できる距離になるといきなり女の子が口を開いた。
「あら、やっと起きたのね。一番最初に階段登って状況理解しようだなんて中々の判断力じゃない。これは期待の新人ね。」
いきなり女の子がわけわからない言葉を並べてきた。
とりあえず無視してこっちの質問をしよう。
「あー…ここはどこだ？」
「ここ？死後の世界よ。そうね…簡単に言えばあなた死んだのよ。」
……
「今なんと？」
「あなた死んだのよ。それでこの死後の世界たる学校に来たの。」
しれっとこの子はなに言っているんだ？
死後の世界？Ｗｈａｔ？
俺が死んだ？Ｗｈｙ？
ついさっきまで自称冷静に働いていた脳が完全凍結した。
「何？あなた記憶ないの？自分が死んだ時の記憶、ここに来る前の記憶を思い返しなさい？」
「…え…」

俺はそう言われて無意識に自分の記憶を探ってしまった。
そしてたしかに、恐らくここに来る前の自分の記憶があった。
怠惰、中途半端、何一つやり遂げたことのない自分。
しかし目の前の女の子が死ぬ時の記憶というものは一切ない。
「すまないが…死んだ時の記憶はないぞ…？」
だが何故だろう。この記憶がすっぽり抜けている感覚は。
まるで元はあったような感覚だ。
「死んだ時の記憶ってことは、生きてた時の記憶はあるのね？」
「え…ぁ、ああ。」
屑の記憶、と言うのが正しいがわざわざここで言うことでもない。
「充分じゃない。まぁ生前の記憶がないままここに来る奴もけっこういるわ。大抵みんなすぐ思い出すけど。」
「ちょっと待て、勝手に話を進めるな。そもそもここが死後の世界だという証拠がどこにある？ここは俺の夢の中かもしれないだろ。」
そもそも訳が分からなすぎる。何だここは？
このリアルな疲労感は、自己の存在感は。

もしこれが現実なら俺は今までの固定概念の殆どを捨てなければならない。

それを受け入れるには情報が足らなさすぎるのだ。

しかし目の前の女の子は、なにいってるのこいつ？的な目でしか見てこない。

「はぁ…順応性を高めなさい。そしてあるがままを受け入れるの。」

そう言って女の子はおもむろに校舎の上の方を指さした。

「あそこでこの世界、学校の説明をしてあげるわ。ついてきなさい。」

こうして俺は強制的に連行された。

校舎の屋上につれて来られた俺はそこから眺めれる景色に驚愕した。広大な学校の敷地、そして学校から一歩出ればあたりは木で生い茂った森、しかもその森は霞がかって視認できる限界まで広がっており、まるで世界の果てまで広がっているようだった。

「まるでこの学校は孤島だな。」

正直な感想である。

「意外に冷静なのね。もっとオーバーなリアクションをすると思ってたわ。」

景色を堪能していた俺の背中に、ここに強制的に連れてきた女の子が言った。

俺が振り返ると女の子は俺に缶ジュースの缶を投げてきた。

極めて冷静にそれを受け取る。

「…これは？」

「ｋｅｙコーヒー、美味しいわよ。」

俺は疑いなくその飲み口をあけ、口に運んだ。

「……ん」

たしかに悪くない。

というか屋上に柵がないってどういうことだ。

俺が屋上に柵がないことに少し驚いていると、女の子は自分の分のコーヒーを飲みんで言った。

「さて、なにから話そうかしら、何を訊きたい？」

「とりあえずここは何なのか。」

最大の疑問である。

「さっきも言った通り、死後の世界。理不尽な人生を強いられ、命を奪われた者が来る場所よ。」

理不尽な人生、命を奪われた者。

俺は頭の中にその言葉を溜めながらさらなる情報を求める。

「それでここに来でどうする？一生をここで過ごすのか？」

「ここで私達は元からこの学校に配置されている一般生徒、私達からはＮＰＣと呼ばれる生徒と学生生活を過ごし、無事成仏する。そのための世界よ。」

…成仏。

…ＮＰＣ。

…ＮＰＣ？

「ＮＰＣってなんだ？」

なぜここでゲームだ。

ここは電脳世界か何かか。

「話聞いてた？一般生徒。例えばあたしみたいにこの世界の事情を知らない。姿や言動は普通の人間と一緒、けど比喩的だけど魂がないわ。」

魂と言われても。

「簡単に言えば死んでないわ。元々配置されているのよ。ちなみに教師もね。」

何とも返しずらい内容だ。

それもこれも、俺が死んだ時の記憶がないからか。

俺はとりあえずもらった情報を簡潔にまとめて結論を出す。

「未練のあるような生き方をした者が集い、その憂いを晴らして成仏するための世界。ならこの世界を作った奴は…」

「神よ。」

だろうな。

女の子は俺の言葉を代弁した。まるでそれを恨んでるかのように感じられる声で。

「ここからは俺の予測だが、いいか？」

「え、ダメよ？」

「何故！そこは聞こう！」

「冗談よ、どうぞ。」

俺は一回咳払いをして、俺の憶測を話す。

「まず、お前のような奴は何人もいる。」

「正解。」

「そいつらはお前のと同じような制服を着ている。もちろん男は違うだろうが。」

「正解。理由は？」……

「ついさっき校内を歩いた時、お前と同じ制服を着た女の子が二人ほどいた。黒スカートの制服の女子は俺に見向きもしなかった。だがお前と同じ制服の女の子は俺を目で追っていた。興味津々に。あれが仲間なんだろう？」

「ご名答よ。あなた鋭いわね。」

「人間観察が趣味の一つだ。」

「生前友達がいなかったのね…可哀想に。」

「そうだよちくしょう。」

俺が刺さる言葉を言われ少々涙目になっていると…

「私達は、」

女の子はさっきまでの説明するようにとはまた違った感じで話し出す。

「けど私達は、みな生前すさんだ人生を歩んで死んだ人間。こんな世界を作り出せる神が、私達に理不尽な人生を強いる意味がわからない。」

彼女の言っていることは正論だ。

彼女の人生がどんなものかは知らないが、理不尽な人生を強いといてこんな世界を作り出す神の気が知れない。

「だから私達は決めたの、神への反抗を」

そう言って、俺に右手を差し出す。

「ようこそ死後の世界へ、あたしの名前はゆり。そしてこの世界で神に反抗する組織、死んだ世界戦線のリーダーよ。あなたは？」

もはや俺は彼女の言葉を何一つ疑っていなかった。

彼女の言葉からダイレクトに伝わる感情が、何一つ嘘をついていない。

そう思わせる。なら悩む必要はない、たとえこれが夢であろうと、死後の世界だと言う証拠がなかろうと、信じていいはずだ。

俺は自分の名前を名乗ることにした。

「……堺だ。」

下の名前は何故か思い出せなかったが、俺はたしかに名字が堺だ。
その記憶はある。

このさいこれを気にするのは後だ。

そして

「じゃあ堺君、唐突だけど入隊してくれるかしら？私達、死んだ世界戦線に…！」

屈託のない笑顔と共に、ゆりは宣言するように言った。

その手を握り返せば、俺は仲間になれるのだろう。

俺は、その手を…

―To continue―

音とリズムと魂で（前書き）

やっと更新です。
今回は後書きもありますのでよろしくお願いします。
今回と前章を含めて、第一回とさしていただきたいと思います。

音とリズムと魂で

俺はその手を……

「……せっかくだが。」

握らなかった。

俺がその行動をとるとゆりは驚いた様子もなく言った。

「意外ね。かなり手応えがあったとおもうんだけど？」

「俺はお前の言ったことを信じるよ。ただゆりの人生が理不尽を強いられたものだったとしても、俺の人生はそんなんじゃなかった。」

そう、俺の人生は自分の行動の結果で、ああ、なった。

何一つ神の所為になんてできない。

「…満足する人生だった？」

ゆりが目を閉じてどこか疑うように聞く。

「満足なんて出来るものじゃない。だが自分の失敗を誰かの所為には出来ない。そしてそんな奴が神に反抗する組織に入るべきじゃない。」

そう言ってコーヒーを飲み干す。

さて、これでゆりは簡単に諦めるだろうか。

その戦線が人数不足、とは思わないが決して多くはないだろう。

「しょうがないわね。まぁいいわ、時間は無限にあるしよく考えなさい。今日はあくまで勧誘の第一回にしかすぎないわ。」

そう言って不適に笑うゆり。

おいおい、これからも勧誘してくるのか。

まるで部活存続の危機に瀕した一種の部活だな。

必死に勧誘を勧めてくる。

しかし今のゆりとの会話で、そのまま流してしまいそうになったこの世界の根幹の部分を表す決定的な言葉に気づく。

「時間が、無限…？」

「えぇ、ちなみにこの世界は誰も病まないから病気にならない、死ぬこともないわ。」

そんな馬鹿な。そう口に出しそうになって止める。

―ここは死後の世界―

死にながら生きると言う究極の矛盾を与えられた人間に死を与えることは不可能。

なら死ぬことはないというのは頷ける。

だが…

「さすがに、それをすぐ信じるのはな……何か実証することがあれば……っ」

口に出してからしまったと思った。

「あら…じゃあ、あなたで試してみましょうかぁ～。」

ゆりがいきなり、満面な笑みで最悪な発言をする。

その笑顔を見て、俺は全身に悪寒が走った。

「そこから落ちるなんてどぅ？最高のバンジージャンプを味わえるわよ？」

「なっ！今からお前がさせようとしてることはただ自由落下だから！！」

ゆりがじりじりと詰め寄ってくる。
それにあわせて俺が後退する。
どんどん追い詰められていく。
そしてついに背中が柵に当たった。
ん？さっき柵を視認できなかったのは景色に目がいっていたからか。
しかし、今体当たりで体を押されでもしたら柵ごと俺が地上に吹っ飛びそうだ。
冗談じゃない、冗談じゃないぞ。
しかしゆりはいきなり玩具に飽きた子供のような表情をして俺に背中を向ける。
「冗談よ。」
その言葉と同時にチャイムが鳴る。
「もうすべての授業も終わったし、あなたは寮に戻りなさい。また会いましょっ。」
そしてゆりは屋上から去って行った。
呆けている俺は一人残される。

「……汗？」

頬を手をおく、指が一粒の汗に触れた。

それがこれがリアルだと実感させる。

―これは現実だ―

俺の魂にそう伝えていた…。

俺は校舎を出て、寮を探すことにした。

と言っても教師やそこら辺にいる一般生徒に聞けば早いのだが……。

ＮＰＣだと思うとあまり気が進まない。

ゆりの言葉を丸呑みしているためだった。

しかしＮＰＣの定義が不明だ。

一定のことしか話さないのか？

その可能性は高いが、それでは死んだ人間との生活に障害が出るはず。

なら、まともな人間として普通のことしか言わないのだろう。

「しかし…みんないかにも特徴がなさそうだな。

どうせなら戦線の奴に聞くか。」

俺は生徒がまばらな外を歩いてゆりと同じ制服の女子を探す。

しばらく適当に歩いていると、自動販売機が置いてある場所についた。

「……何か、飲み物買えるか？」

俺はお金か何かを持ってないか制服のポケットを漁る。

けれどまったく現れない。

「……死後の世界っていうのに金の定義はあるのか……。」

そう俺が残念な気分に浸っていると、俺の横からスッと女の子が現れて悠々とお金を入れて飲み物を買った。

身勝手ながら少々イラっとしたのは内緒だ。

「……あ。」

その女の子を見るとゆりと同じ制服だった。

赤い髪の女の子だ。

俺はしめたと思いはなしかけることにした。

「…なぁ。」

その女の子は俺の言葉に応えるように振り向いた。

「ん、なに？」

その子はボーイッシュと違う、男性である俺がかなり驚くほど格好良い女の子だった。

そして口から放たれる透き通る声。

一瞬思考が停止してしまう。

「……。」

「……おい？」

「…あ、申し訳ない！寮の場所を教えてくれないか…？」

「…寮……あんたこの世界に新しく来た？」

やっぱり簡単にバレるか…。

「…まぁそんなとこだ…ゆりに一通り説明されたがまだ場所とかわからなくて…。」

「もうゆりに会ったんだ…なら何故その制服なの？」

やっぱり男子も制服が違うのか。

今度見てみよう。

「…いや戦線入隊は断ってる。これについての理由は今控えるが。」

「そう……なら教える代わりに少し手伝ってくれない？」

あれ…？

「…お安いご用だ。何をすればいい？」

交換条件を出すとは思えなかったが…まぁ引き受けてもいいだろう。

「あたし、バンドメンバーに飲み物買うためにここ来たんだけど、持ちきれないから持って欲しいんだ。」

目の前の女の子の口から出た言葉、バンドメンバー。

バンドしてるってすごいな…そういうのも、この世界ならアリなのか。

女の子は水のペットボトルを一本買った後、缶コーヒーを三つ買った。

缶コーヒーのうち二つを俺に渡す。

「助かるよ。あたしは岩沢。あんたは？」

少し笑みを浮かべて自分の名を名乗る岩沢。

「俺は堺、長い付き合いになるのか短い付き合いになるのか解らないが…以後よろしく岩沢。」

「堺ね…こちらこそよろしく。じゃあついてきて。」

俺はその場を後にする岩沢の背中についていった。

岩沢についていった俺は空き教室らしい場所についた。教室からドラムとギターの音が聴こえる。
だがベースの音が聴こえてない。

「……」

不思議なことに岩沢はドアの前で佇んでいる。

俺は後ろからしかその姿がわからないが、それでもわかる…あれは音とリズムを聴いている。

他人を寄せ付けないほどの音楽への気持ち…生粋のミュージシャン、か…。

少ししてギターとドラムの音が止むと、岩沢が俺の方を向いた。

「ぁあ、悪い。待たせちゃったか。」

「いや、音を聴いてたんだろ？しかたない。」

「へぇ、わかるんだ？」

「……誰でもわかるだろ。」

実際、わからない方が多いだろう。
俺は音楽を少しかじっている程度だからむしろわかったのは奇跡だ。

「中に入りなよ。メンバーを紹介する。」

岩沢は少し笑みを浮かべて、ドアを開けた。

「帰ったよ。」

岩沢が教室に入ると元気いっぱいの声が廊下にいる俺の耳にも響いた。

「岩沢先輩〜。大丈夫ですか？時間かかってましたね！？」

「ごめん、関根。」

「いえいえ！本来この関根が行くべきところを岩沢先輩が「あたし一人で行くよ。関根は二人のリズムと音チェックをお願い。」って言って出て行っちゃうんですもん！ごめんなさい！飲み物持ちきれましたかっ！？」

…よくしゃべる。

俺はふと心の中で苦笑した。

「それについては手伝ってくれた奴がいてくれて助かったんだ。」

「…へ？誰です？」

「堺？」ー

岩沢は廊下で待っている俺を呼んだ。

困るな。少し恥ずかしいんだが。

誰かに促されるのは得意じゃない。

「…はじめまして。」

俺は教室に入った。

するとついさっきまで岩沢と話していたであろう金髪長髪が目を引く女の子が俺を見て固まっていた。

「い……」

い…？

目の前の女の子がぷるぷる震えて。

「岩沢先輩が男の人を連れて来たぁあああーーーっ！！！」

そして叫んだ。

「大変だよ～！みゆきち！！ひさ子先輩！！！」

奥の方にいる残りのバンドメンバーへ走っていった。

「……元気だな。」

「それが関根のいいとこだよ。」―

そうなのか？と言いかけたがとりあえず関根と言う女の子に目を向けた。

関根が二人のバンドメンバーと話していた。

「あの音楽きちの岩沢さんが男の人連れてきたんですよ！！」

「はぁ？何ありえないこと言ってるんだ…関根。」

「そうだよしおりん。そんなことはありえないよ。」

「むぅ、えぇい！ならば彼を見よ！？」

関根が俺を指さす。

人を指さすな。

「……どうも。」

二人が俺を注視したため、俺はとりあえず挨拶まがいなことを言った。

「…一般生徒？岩沢先輩が？」

青紫色のこれまた長髪の女の子が目を丸くしている。

「ねっ！ねっ！言ったでしょ！？」—

関根が勝手に一人で盛り上がる。

俺はもう一人の女の子に目を向けた。

そして固まる。

「……」

「どうしたんですひさ子先輩？驚いて言葉も出ないんですか？」

「……え、あぁ、びっくり…だよな。」

ポニーテールの姉御肌の印象がある女の子。

…ポニーテール？

まさか…あの子…じゃないよな…。

けど、似てる。

頭の中の音楽室にいたギターの女の子と丸かぶりだ。

俺が固まっていると岩沢がみんなを落ち着かせるため少し大声で話し始めた。

「みんな、こいつは今日から新しくこの世界に来た奴だ、仲良くしてやって。」—

そういうと岩沢は俺に自己紹介するよう促す。

焦りながらも俺はそれに従った。

「堺だ。まだよくわからないがよろしく。」

まず関根が前に出る。

「関根です！バンドではベースをぷりぷり弾いてます！」

ベース、ってこの子がか…上手いのか？

というかぷりぷりってなんだ。

「あたしは入江です。ぇ、とバンドではドラムやってます…。」

少しおどおどしながら入江が自己紹介する。

ドラムと言う印象があまりにも薄い。

そんな華奢な体で叩けるのか？

「…あたしはひさ子。リードギターをしてる…。」

「…あぁ、すごい上手いんだよな。」

「「え？」」ー

ひさ子に対して俺の口からいきなり意味不明な言葉がすべり出た。

自分で自分に驚愕する。

「え？ひさ子先輩のこと知って「いやいや！ついさっき弾いてたの聴いたからさ！」

俺は急いで関根の言葉を遮る。

そうだ、別に知ってるわけじゃないんだ。

ただそう思っただけだ、そう…だったと思ったんだ。

あの子とこんな場所で会うわけがない。

「それであたしはギターボーカル。」

岩沢が三人の前に立つ。

そして宣言した。

「それじゃ、あたしらの曲聴いていきなよ。堺の歓迎祭だ…っ！」

皆がそれぞれの楽器のポジションにつく。

皆、もうその表情にはさっきまで俺が心配していたものを一切感じさせない。入江も関根も岩沢もひさ子も、全員がミュージシャンの顔だ。

そして始まった。

その瞬間、俺の世界が崩された。

なんだこの高揚感。

なんだこの芯まで響く歌。

なんだこの感動。

これが高校生のガールズバンドが成せる歌なのか？

俺が今まで聴いてきたどのミュージシャンよりも表情も、歌も、一体感も…素晴らしい。

素晴らしすぎる。

こんなものを持っていながら…みんな死んだのか？

これを世に知らしめることもなく、みんな死んでいったのか？

ふと音楽室にいたポニーテールの女の子のことを思い出した。

あの子が音楽室から消えた理由も。

そうだあの子も…

あの子も死んだんだ。

同じ道の仲間にも出会えず、あんなに上手かったのに…あんな悲しい音しか出せずに、死んだんだ。

そんなことは…

―そんなことは許されてはならない―

曲が終わった。

みんなやりきった汗をかいている。

その汗すら眩しい。

俺には眩しすぎる。

「どうだった？」

岩沢がギターを置いて俺に聞いてくる。

俺は迷わず真っ直ぐ答る。

「すごい…！」―

頬を涙がとめどなくつたうのを、感じた。

もう月の光が校舎を照らす夜。

俺は屋上で最初と同じように外の風景を見ながら、人を待つ。

そしてその人は来た。

「何かしら堺君、こんな時間にしかも岩沢さんを使って呼び出して。」

戦線のリーダーゆりだ

「…ゆり、俺…戦線に入るよ。まだよくわかんないことばかりだが、この世界にいる理由を見つけた。」

俺はゆりを呼び出し、戦線に入ることを告げる。

俺は彼女達の歌を聞き続ける。

それが生きた理由すら持たなかった、俺が決めた理由。

今度こそ、やり遂げてみせる。

「そう……なら。」―

ゆりは何かに納得したように頷くと俺に手を差し出した。

俺は今度こそ強くその手を握りしめた。

「私達戦線の合い言葉は、神も仏も天使もなし、よろしくね。堺くん…！」

ゆりの屈託のない笑顔と共に、俺はこの時…戦線へと入ったのだった。

to continue

音とリズムと魂で（後書き）

えーＮｏｔ　Ｔｒａｎｓｆｅｒ　Ｗａｙを書かしてもらっている高橋ひさ子です。

いや、高橋ひさ子ってひさ子のフルネームらしいんですよこれが（笑）

Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！みてた人はわかると思いますが、ひさ子と入江と関根は登場シーン極端に少ないんですよね。

ひさ子はまだ多いほうですが入江と関根はかなり少ない。

特別編に期待です！！

ということで今回ガルデモ大好き主人公で話を書いていきたいと思います。

というか、主人公がひさ子に惚れる描写が第一回でまだないのは申し訳ありません。

ちゃんとガルデモとひさ子追っかけになります（笑）

こうして書いてると堺って音無と逆になってるんですよね。

青空に目覚めて

夜空に戦線入りしてます。

あまり意識せずに書きましたが、今後もこんな描写が増えていくんじゃないかなと思います。

堺はちゃんと死んでいて、生前にいた音楽室のポニーテールの女の子につきましては、明確にひさ子と言う描写はこれからも多分ありません。

これはひさ子の生前がわかっていないためです。

原作ブレイクはしないと言ってますが、オリジナル主人公がいる時点で原作ブレイクしてます…しかし気にしないでください（笑）

最後にこんな短い後書きで申し訳ありません。

これからもＮｏｔ　Ｔｒａｎｓｆｅｒ　Ｗａｙをよろしくお願いします！！！！

感想レビュー、お気に入り登録が増えていくと作者がテンション上がって更新スピードが早くなり内容もおもしろくなると思いますので皆様待ってます！！！！

ではまた次の後書きまで、ごきげんよう―（・―・）―

Revealing Prologue（前書き）

第二回のハジマリ

Revealing prologue

学校ではただただ寝ていた。

休み時間以外はいつもそんな感じだ。

まともに勉強などしたことがない。

それは親への反発とか関係ない、俺の意志で勉強を放棄していた。

これでよく高校に入れたなとたまに自分で自分に驚いている。

しかし高校三年生に上がった頃でもそれは変わらなかった。

今まで追試を受けてないだけましだが、このままだと大学など夢のまた夢だろう。

それでもいいか、と思う。

もしこのまま大学に行けても、きっとこれまでと同じ生活をするのだろう。

そんなものに意味を感じられない。

そんなことを考えながら、今日もまた…俺は音楽室に行ってピアノを弾く。

暇つぶしにしていたそれが、いつのまにか唯一の生きがいのようになっていた……。—

高校三年生の夏休み、学校の補講を受けていた俺は隣席の生徒達の会話から偶然、ある噂を聞いた。

『夜な夜な学校の音楽室でギターを弾く女の子がいる。』

その噂を聞いた俺は信憑性も確認せずすぐその日の夜のうちに家を内緒で抜け出して、学校へ向かった。

あの子、なのだろうか…？

可能性はある。

もしあの子なら話がしたい。

あの子のギターをちゃんと聴きたい。

あの子が抱えているコトを聞きたい。

出来れば力になってあげたい。

解決できれば、あの子のギターはもっとすごくなるはずだ。

そんな夢想、いや妄想と一寸違わぬ思いを抱きながら俺は学校に侵入した。―

夜の校舎の不気味さ意識の片隅にも置かず急いで音楽室に向かう。

だんだん音楽室に近づくにつれて、本当にギターの音が聞こえてきた。

段々とギターの音へと近づいていく。

そしてついに俺は音楽室の前についた。

音楽室に電気はついていない。

しかしギターは鳴いている。

俺は恐怖心を何一つ抱かず、ドアを開けた。

それと同時にギターが鳴り終わる。

「……っ…」

一歩一歩踏みしめて音楽室に入り、俺は暗い教室内を見渡した。

「……！」

すると音楽室にあるグランドピアノの椅子にギターらしきものを持った人物がいる。

まだ暗くてうっすらとしか見えない。―

しかし月明かりが音楽室に染み込んで行き、だんだんその姿がはっきりとしていく。

そこにいたのは――――――

To continue

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7275o/

Angel Beats！―Not Transfer Way―

2011年2月24日10時50分発行